

念佛橋に 子守唄がきこえた

下中谷

絵：野口宣友



一人の僧が能竹から日野を越す山道を歩いていました。賀祥の里に差しかかるつかという杉の木立で、遠くに提灯のあかりがボウと灯っているのが見え、小さな影が僧の方へ近づいてきます。影はお寺の小僧さんでした。僧は小僧さんに笑顔で挨拶をしましたが、小僧さんは黙ってニヤニヤと笑ったまま山を下って行ってしまいました。僧が妙な小僧さんだと思っ

か、女のかすかな声で「ねんねんころりよ……あつこいよ……」と哀しく淋しそうな子守唄が聞こえてきます。僧が声につられて節穴から外を見ると、白山橋に近い小さな橋の欄干に、白い着物を着た女が、同じく白い着物を着た赤ん坊を抱いて立っているのが見えました。女は子守唄を歌って赤ん坊をあやしているようでしたが、腰の辺りまでのびた長い髪といい、やつれた白い顔や紫色の唇といいとても尋常の様子ではありませんでした。僧はあまりの恐ろしい様子に「でたあ〜！」と叫びました。

僧は翌朝、昨晚のおそろしい出来事を豊寧寺の老住職に尋ねると住職は「昔、身ごもった女性があの橋のたもとで死んだのです。供養のために読経を捧げていたために、あの橋は今では念佛橋と呼ばれています。あそこを人が通ると、女性が通行人に子どもを預けようとするのです。自分が死んでも子を生かしたい母心のあらわれでしょうな」と話しました。

成仏できないだんまり小僧さんと幽霊の親子を哀れに思った僧は、住職にお願いで、豊寧寺に8日間逗留し、幽霊たちを供養することを決意しました。

僧は能竹の里の石工から使わなくなったノミとツチを借りると、念仏を唱えながら河原の一枚岩に「南無阿弥陀仏」の文字を彫り込み始めました。渾身の力を込めて「南無釈迦牟尼仏、成仏せし給え！」と祈りながらノミをふるい続けて何日か経ったある日、晴れていた空が急に暗くなったかと思うと、「バッシン！」と大きな音と共に杉の木立に雷が落ち、だんまり小僧さんが雷にうたれて成仏してしまいました。

その雨があがった夜、念佛岩に刻まれた「南無阿弥陀仏」の文字を頭巾をかぶった女が白い手でさすりながら泣いています。女の腕にはすやすやと眠る赤ん坊が抱かれており、「ねんねんころりよ……」という子守唄が聞こえてきます。

その夜の子守唄を最後に、河原から子守唄が聞こえてくることはなくなり、幽霊の噂も「タリとやみました。

おしまい